

「岸和田の地域経済活性化の可能性」

同志社大学商学部 教授

石田 信博 氏

略歴

1956年大阪府岸和田市生まれ、岸和田育ち。1986年同志社大学大学院経済学研究科博士課程修了。大阪商業大学教授などを経て、2003年から現職。専攻は、地域経済学、交通経済学。主な研究テーマは、物流システムと地域経済の関係について。近年は、文化と地域経済の関係についての研究も行っている。

はじめに

みなさんこんばんは。今ご紹介いただきましたとおり、大学では、地域経済学という、地域に関係するいろいろな経済問題を扱う領域を研究しております。それは南海電車に乗って、京都に向かうJRあるいは京阪、阪急に乗り換えたあたりからの顔です。私は岸和田市の春木に住んでいます。生まれも春木で、小さいときから岸和田市内を歩き回っていました。祭が大好きです。ここにも、私が祭などでお世話になっている方も何人かいらっしゃいます。今日は京都の顔を少しは披露しなければと思って来たのですが、日頃からよくお目にかかる方がいらっしゃることもありまして、余所行きの顔は止めにしまして、できるだけ岸和田に密着する話ができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速進めさせていただきます。「岸和田の地域経済活性化の可能性」というテーマをいただきました。岸和田のこと

は、以前から、肌で感じながら、私なりにいろいろとったりしていることもあります。日本の国の経済状態が1か月ぐらい先はどうなるかが分からないという中で、地域の経済を活性化するためには、どうすれば良いのかという話が、あちこちで議論されています。地域の経済を活性化するためには、何かの仕掛けといたしますか、核となるものが重要です。その事例は後で申し上げますが、その核をどんなふうにして見つけるか、それからそれをどういうふうにして上手く使っていくかというところがポイントになると思います。その辺りについて、これからいろいろお話できましたらと思っています。

お手元に、今日の話をもとめたものを配っていただいております。その内容に沿って進めていきたいと思っています。話は多少前後することになるかもしれませんが、それと、あまり聞き慣れない言葉を使ったりすることがあるかもしれませんが、そのときは、ご遠慮なくご指摘いただけましたら、

ご理解いただけるように詳しい説明をしたいと思いますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

岸和田市の経済ウエイト

まず、岸和田市の経済はいったいどうなっているのかということです。ここにいらっしゃる方は、当然岸和田のこと、あるいはその近辺のことについて詳しい方、あるいは関心をお持ちの方がほとんどだと思いますので、詳細な数値とかデータについては、私より皆さんの方がよくご存知だと思います。そこで、岸和田市の主要な経済データをいくつか取り上げて、岸和田市は大阪においてはどの程度のウエイトがあるのか、また泉南地域の中でどれだけのウエイトがあるのかをみてみます。岸和田は、経済的にはどれくらいのウエイトがあるのかということを確認したいと思います。

まず、スクリーンに2%とか35%という数字がありますが、これは、左の数値は大阪府全体を100とした場合、岸和田市の世帯数はそのうちのどれ程の割合を占めるかという値で、右の数値は泉南地域、具体的には岸和田市から南、和歌山県の手前までですが、その泉南地域全体を100とした場合、岸和田市がどれくらいの割合を占めるかという値です。

世帯数と人口のウエイトはそれぞれ比較的大きい値になってはいますが、それでも大阪府全体の6%程度です。泉南地域においては、岸和田市は全体の3分の1強の世帯数と人口があります。大和川の南側、泉州地域では、堺が一番大きいまちで、その次に大きいまちが岸和田市だとはよく言われていることですが、この数値にもそれが表れていると思います。

産業についてみてみます。製造業の事業

所数、従業者の数、そして出荷額について、同じようにウエイトを計算してみました。事業所と出荷額のウエイトは大阪府全体においては2%未満です。従業者は5%ぐらいです。泉南地域の中では大体3分の1ぐらいを占めています。

次に商業です。卸売業と小売業についてみます。上から、卸売業の事業所の数、従業者の数、それから販売額に関して、それぞれのウエイトを同じように計算してみました。卸売業は、先ほどの製造業と比べると、泉南地域においては比較的高い値を示しています。ところが大阪府全体においては1%に満たない従業者数、あるいは販売額です。これは卸売業が大阪市にほとんど吸収されてしまっているということの表れです。それから小売業ですが、同じように事業所数、従業者数、販売額、それから売場面積をみていただきますと、これは製造業と同じように特に泉南地域においては3分の1強というウエイトを占めているというのがご覧いただけます。この3分の1という値が、泉南地域における岸和田のウエイトだということが分かっていただけだと思います。

ちょっと観点が変わりますが、社会教育施設についてもみてみます。その総数というのは、公民館とか図書館とかいろいろなものがありますが、その全体数のウエイトです。それから、公民館と図書館、それぞれの数のウエイトです。このような施設になると、岸和田市は大きなまちですから、泉南地域においては半分近いウエイトを占めます。

その下は、興行場で、映画館や民間のスポーツ施設のようなものです。そういうものは、もともとの数が少ないということもありますが、岸和田市の泉南地域の中でのウエイトは高くなっています。

次に、人口一人当たりの製造出荷額、卸

売業の販売額、それから小売業の販売額をみてもらいます。岸和田市は、卸売業の販売額が、泉南地域の中では平均よりもかなり高く、1.5 倍ぐらいになっています。また、小売業の販売額を人口一人当たりで換算してみると、大阪全体の平均とほぼ同じ、あるいはそれを少し上回り、100.4 になります。泉南地域全体では 119.2 で平均より上回っているということがご覧いただけるとと思います。

従来の考え方は、やはり製造業が地域の産業振興の中心になるということです。製造業を重視するというケースが多い。それはやはり、モノをつくるということが直接に生産額に結びついて、その生産額がいわゆる国で言う GDP（国内総生産）これを地域に当てはめると地域の GDP ということで、地域内生産を高めるという方向に結びつきますから、この製造業を何とかしたいという考え方が、従来からの地域経済振興策の基本になります。さらに、同じように商業についても、商業の販売額をできる限り高めていきたいというのが従来の考え方になります。

それでいいのでしょうか？というのが今日の話です。岸和田の現状はご覧のとおりです。ただ、先ほども言いましたが、国の経済状態が、これから先はどうなるのか分からないといわれている時期でもあります。それから地域の経済、例えば、歴史的にみてもこの地域は織物関係をはじめとする工業が盛んな地域でしたけれども、そういう産業は少なくとも日本国内では衰退しています。衰退という言葉が良くないかもしれませんが、かつてほど、元気ではなくなっています。この時期、この地域において、製造業をもとに地域経済を活性化するのはなかなか難しいということです。その辺をまずご理解頂けたらというのが、私のまず始めの問題提起になります。

「それでも地域経済が活性化するように策を考えろ」というのが私に与えられた課題の一つかと思います。ダメと言うだけなら誰にでも言えることですが、そこで何か考えなければならぬのです。ただ従来型の考え方というのはなかなか難しいということは言えるわけです。その辺で少し新しい視点というのをみてみたいと思います。

地域経済活性化の考え方

地域経済の活性化といいますが、これは一体何でしょうか。岸和田市であれば、岸和田市の経済と、それに関係するいろいろな側面がありますが、それらの幾つかの面をパワーアップすることが活性化ではないかと考えられます。つまり、地域のもつ力を何とかパワーアップすること、これが地域の活性化、あるいは地域経済の活性化にほぼ直接に結び付くと思います。

そこで、その地域の力とはどんなものを考えてみたいと思います。その前に、国力、国の力は、何で表現されるのかということを見てみたいと思います。これは一般的に言われることですが、例えば、日本の国力、アメリカの国力というのは何かということです。現在では、まず経済力が挙げられます。経済の大きさ、あるいは影響度、外国に対する影響力がどれくらい大きいかということ。それは国力の一つです。

つぎに文化力。これは広い意味での文化と考えてもらったらいいのですが、いわゆる文化的影響力がどれだけ大きいかということです。

それから政治力。これは行政力といってもいいでしょう。政治的なパワーがどれくらい大きいか。それも、国力の一部です。

それから、これは日本ではあまり馴染まないかもしれませんが、国によっては軍事力を重視するところもあります。これも広

い意味での国力の一つだと思います。このように、国の力を表現するものは、このような代表的要素があります。

それを次は、地域にあてはめてみましょう。地域という概念は、例えば岸和田市という市町村レベル、もう少し広い泉南地域、あるいは泉州地域、あるいは関西地域というふうに広く捉える場合もありますし、もっと大きくアジア地域という捉え方をすることもできます。一般的に、地域という言葉が使われるのは、市町村単位あるいは、それを幾つか束ねた比較的狭いエリアを考える場合が多いと思います。

その地域力ですが、先の国力と対照させてみると、資料のようになります。まず自然力、今よく使われる言葉でいうと、環境力です。それから経済力、文化力、社会力、そして行政力です。先ほどの話と対応させると、それぞれの地域には、自然、経済、文化、社会、行政のパワーを生む要素があるはずで、それは、自然力、環境力の場合は、これは経済の言葉になりますが、自然資本といわれるものです。つまり、本来その地域に与えられている自然、あるいは多少人が手を加えているけれども、広い意味での自然に関係するもの、それを自然資本と呼びます。

今日の話に特に関係が深いものは次の3つです。まず、経済力。これを生み出すのは経済資本といわれるのもので、経済に関係する様々な施設、企業、公共サービスなどです。経済資本というのは経済的な価値を生み出す役割をしています。

次に、文化力です。これは、今日の話で一番訴えたいものです。文化という言葉は昔からありますが、文化を生むためには、人を含めて、何か装置や仕掛けのようなものがあります。先ほどの自然資本とか経済資本と同じように考えると、文化資本というものが存在します。そういう装置あるいは

仕掛けがあると、それは広い意味での文化的な価値を生みます。では、文化的な価値とは一体何でしょうか。一般に、文化は、何か文化的なものを生みます。創造的なものとか、美しいと思われるようなものを生み出します。いわゆる美的な価値があります。それに、社会的価値といいたいでしょうか、その文化が存在することによって、それが社会に影響を与えて、社会全体の質を高めて、充実させるという影響力ももっています。この点は、地域の活性化を考えると目に注目すべきことです。

そして、社会力です。社会力を生み出すものは、社会関係資本です。ソーシャル・キャピタルと呼ばれています。それは、いわゆる組織、社会的な組織です。それはもちろん社会的な価値を生み出します。

それから、行政力、岸和田市でしたら、この市役所の方々を中心としたいわゆる行政のパワーです。これらの要素が充実すると、地域力も大きくなります。

これらの要素は、それぞれが別個で独立しているというものではなくて、お互い関係しています。ですから、別々に考えようとか、これは関係ないから無視しようとか、例えばこれは経済の問題とは別だから切り捨てようとか、そういう考え方は少なくとも今は通用しないということをご理解いただけたらと思います。

さらに、地域経済を中心に地域の個性的な発展を考える際に重要な点は、地域レベルすなわち市町村レベルでもお互い競争関係にあることです。岸和田市は、貝塚市とか泉大津市とか泉佐野市とか堺市とか、近隣エリアの他の市町村と仲良くしなければならぬことは当然です。しかし、岸和田市は中でも一番になりたいと願います。これは企業と同じです。企業は、同じ産業の仲間とは当然仲良くやっていきたい。けれども競争しています。自分が一番になり

たいのです。競争し、一番になるためには、他と同じであるよりも、個性的である方が、競争力をもつことになります。これは、企業であれば、同じモノをつくるにしても、他とは違いをつける、差別化を図るということです。それが新しい付加価値となって、自社の製品やサービスが、競争力をもつようになります。これと同じです。

地域を発展させるためにと、昔から言われてきたのは産業、特に現実には、商工業をとにかく発展させることです。産業を発展させる。それが、全体として経済的な発展に結びつく。そして、その地域が大きい魅力的な地域になると、人や企業を新たに引き寄せる吸引力をもちますから、人口の増加に結びつきます。人口の増加は、地域発展の進み具合を示す、最も分かりやすい指標です。今もこれは重要な考え方なのですが、敢えて言えば、古い考え方だと思えます。それを否定するものではありません。しかし、個性的な地域発展を考えますと、地域の文化に注目することが重要です。日本は、経済的には、どこでも豊かな状態になっています。そうすると、人々はさらに別のものを求めます。お金はたくさん欲しいです。けれども、食べていくのに困らなくなれば、日常の生活をもっと豊かにしたいと思う人が多いでしょう。心の豊かさとか、質の高い生活を人々は求めます。それを支えるのは、広い意味での文化、文化の発展です。自分の住む地域に、何か独特の文化があって、それが誰もが素晴らしいと認めるようなものであれば、そこは個性に富んだ、豊かな地域であるとみることが出来ます。それは、その地域の競争力であり、大きなパワーになると理解して頂けたらと思います。

文化、文化と言っていますが、かつての経済的発展を決して軽視しているのではありません。その点は誤解のないようお願い

いたします。商工業の発展、これは大事です。岸和田市内の企業をはじめ、様々な経済活動をされている方々が、それぞれレベルアップするためにはどうすればよいかを考えることは重要ですが、それだけではちょっと行き詰まりがあります。それを打破するための一つの方策として、文化をうまく使おうというのです。それで地域を個性化させ、経済力を高めようということです。その辺りを考えたいと思います。

何でそんなことが言えるのでしょうか。一番上に、サービス経済化の進行と書いています。これはもうご承知のとおりで、現在の経済は、数字の上でもサービス産業、第3次産業のウエイトが高まっています。これは日本中どこでもいえることです。それから、データの上では、例えば製造業とか、農林水産業にカウントされていても、実際に仕事の内容をみると、所属する産業は確かに製造業であるかもしれない、あるいは農業であるかもしれないが、やっている仕事の内容は、いわゆるサービスに関する仕事、第3次産業的な仕事であることが多いです。ですから、数字が表す以上に、サービス経済化が進み、サービス産業のウエイトが高まっています。日本は、特にそれが高いです。そのサービス経済は、あとで話をしますが、文化と大きく結びついていきます。資料では、文化の発展と経済発展がそれぞれ独立であるような書き方をしています。しかし、それらは別々の切り離した問題ではありません。合せて一緒に考えなければならぬし、互いにうまく絡ませあうことが重要です。

一つは、経済の発展というのは文化の発展を可能にします。古い時代、「文化なんて、そんなこと言うてられへん。」と言われることがありました。つまり、貧困が厳しいと、「文化なんてものはどうでもええ。とにかく毎日食っていく事が大事なんや。」となり

ます。経済が発展し、豊かになってくると、ゆとりがでてきます。そうすると、心の豊かさまたいなものを求めます。経済が発展するということは、文化の発展を可能にするということです。日本は、もちろん岸和田も、今はその状況にあることに間違いはないと思います。

文化が発展したらどうなるでしょうか。文化を広く考えていただいたらいいのですが、文化は“創る”ということ、創造性と関係があります。

もう一つは、高尚な文化の担い手からは叱られるかもしれませんが、文化は娯楽性と結びつくと思います。ですから、文化は、“創る”ということと、楽しむということの二つの面をもっています。楽しむというのは、生活のゆとりと関係してくると思います。文化が発展すると新しい価値が創りだされます。新しい技術も、新しい価値を生むことに結びつきます。知的財産を新しく創ることに大きく寄与します。新しい価値を生み出して、それが知的財産の形成に寄与し、それが経済発展に貢献します。うまくいけば、文化の発展が経済発展を促進し、経済発展が文化の発展を実現するという、好循環が期待されます。逆になったらどうするのかという疑問があるかもしれませんが、可能性の話ですから、悲観的なことは考えないようにしましょう。このような好循環が期待できるという話です。そして、好循環を生むためには、核が必要となります。それに期待されるのが文化産業です。

「文化」による地域経済活性化

文化産業について、今から説明します。この話は、私が勝手に言っているのではなく、専門的に分析している研究者がいます。例えば、名前を聞いたことがあるかもしれ

ませんが、デイヴィッド・スロスビーが『文化経済学入門』という本を書いています。日本語にも訳されていますが、その中にも書かれています。日本人でしたら、どちらも京都大学の名誉教授ですが、池上惇さんと山田浩之さんが、『文化経済学を学ぶ人のために』という本を書かれて、文化産業について力説されています。表現はそれぞれ異なりますが、私もそれには同調しています。そこで、文化による地域経済活性化を少し考えてみたいと思います。まず、文化産業っていったいなんですか？ということです。「文化というのは創造に関するもので、それを産業や経済と結びつけるとは、なんちゅう不謹慎な奴や。」と、言う方もいらっしゃるかもしれませんが、現代的な経済社会では、経済的な側面と完全に切り離れた文化は成り立たないと思います。例外的に成り立つものがあるかもしれませんが。例えば、だれもが文化と思うような古典的な演劇、能とか、歌舞伎とか、クラシックの音楽、これらは、非常に芸術性、文化性が高いと思いますが、それでも、やはり興行、つまり芸能産業とかかかわっています。世界的に有名な能を演じる人であっても、世界的に有名な音楽家であっても、仕事としてやっているのですから、経済の側面、産業と関係することには違いありません。こういうふうに産業と関係すると考えられます。

文化産業、それは何かと言いますと、文化的なものの生産とか流通にかかわる産業です。それは実際に文化を創造する側の文化活動と密接に関係する産業です。具体的には、音楽とか、絵画のような芸術、演劇、文学、舞踊、そういったものが芸術に関する文化活動です。それを支える産業があります。先ほども言いましたが、コンサートにしても、やはり入場料を払って聴くわけですから、一つの産業です。それから学術、

いわゆる研究活動ですが、例えば大学がその一例です。大学も、今は研究だけをしているのは許されない状況にあります。我々は地域、例えば岸和田市の役に立つような研究をして、それを地域に還元しなければなりません。これも何らかの形で地域の活性化と結びつきます。技術的な研究をやっている方でも同じです。出版もそうです。それから生活文化、これは日常生活と直接に関係してくるのですが、芸能、マンガ・アニメ、スポーツ、料理、茶道・華道、いわゆる生活文化です。これらも産業として成り立っています。そしてゲーム、申し上げることもないと思いますが、これも産業として成立しています。それらは、狭い意味での文化、実際の文化活動と関係します。これだけでしたら、「昔からそのままやないか。これが地域経済に何の役に立ってきたんや？」という話になるのですが、少し見方を変えて、それらがさらに関連するところまでみると、大きな可能性を発見できます。

文化活動には、それを支援するものと、それを利用するものがあります。それも文化と関連しています。まずは文化支援産業です。例えば、文化手段産業という言葉が資料に書かれていますが、それは先ほど言いました文化活動の手段を生産する産業です。楽器をつくるとか、印刷機をつくるとか、映画で使う映像機器をつくるとか、コンピューターをつくるなどの産業です。これは、文化の産業です。それから、文化を実際に創造する人たちを育成する人材育成産業。これは教育産業です。それから、創られた文化的な財・サービスの流通にかかわる産業。これは文化流通業と書いていますが、例えば CD やビデオの販売・レンタルや、ミュージアムとかギャラリーなども文化流通業になります。これは、資料の一番下に文化産業の後方連関的な産業と書い

ていますが、文化産業を支援する、バックアップするという意味での後方連関的な産業になります。

それから、文化利用産業があります。これも文化に関連する産業です。先ほど説明しました文化支援産業が基盤となり、文化創造が行なわれて、文化的な財・サービスが創られるわけですが、その文化的財・サービスを利用する産業です。例えば、観光産業、ファッション産業、建築業、広告業などがこれに関わります。これは、文化産業を利用するという意味で、文化産業の前方連関的な産業です。

これまでの話を図で示します。真ん中が狭い意味での文化に直接関係する文化産業です。これは単独では成り立ちません。後方から支える文化支援産業や、それから創造される文化的財・サービスを利用する産業が存在します。一番上に、広義の文化産業群と書いていますが、文化を広く考えてみたら、産業としていろんなものが含まれるわけです。

繰り返しになりますが、地域経済発展のためには、必ず起爆剤、核が必要です。その核を何にするかということですが、今の時代は、文化、それを核として捉えることが大事です。つまり、もう一度言いますと、経済と文化、これらを上手く調和させて地域を発展させることをめざすならば、地域の持つ文化資源を発掘し、それを活かした、広い意味での文化産業の発展を図る戦略をもち、実行することが課題になると考えることができます。

そこで、岸和田と関係付けて、文化を核にした、文化をキーワードにした地域経済の活性化を考えてみます。繰り返しになりますが、それは、広い意味での文化産業群を活性化させることによって、産業を全体的に活性化させる効果を生み出すことを目指します。だから、文化と関連する産業に

狙いを定めて、それを活性化させることが一つの戦略として考えられるのではないでしょう。

それと、文化の担い手を育成すること、特にこの地域に深く関係する人材育てていくことも重要です。それと関係するのは、やはり教育産業です。その中でも、ある程度、高度に組織化されているものは大学です。大学は、昔は人を寄せ付けないような雰囲気がありました。今はそんなことはありません。岸和田市は、すでに和歌山大学といろいろな関係をもっていると言っていますが、その他にも大学はたくさんありますので、それをうまく活用していくことも一つの戦略になります。

それから文化の資源をみてみますと、岸和田市独特の文化資源があります。しかし、それだけでというのはかなり単発的で、全体的な発展にはなかなか結び付かないところがあります。「それで差別化を図って、競争するんや。個性化を図って競争していったらいいんや。」という話ですが、やはり、同じような資源を共有する近隣の地域、市町村と仲良くし、ネットワーク化を図ることが、まず重要な点であると思います。

ご承知の通り、泉州地域には歴史的な遺産がたくさんあります。有名なもの、そうでないものがありますが、これは文化遺産でもあるし、自然の資源でもあります。それから、だんじり祭。これは泉州の大きな大きな観光資源で、後で詳しく申し上げますが、地域の資源であることには、間違いありません。それを、「あれは祭り好きが勝手にやっていることや。」と言って、放っておくのは、あまりにもったいない話だと思います。それを考えている人は昔から多いと思います。

もう一つの資源は関西国際空港です。最先端の施設が近くにあり。関西国際空港は泉佐野の沖にありますが、岸和田から

も見えているわけで、やはり岸和田の資源でもあります。それを使わない手はないと思います。国際空港は、ただ単に飛行機が離着陸する場というだけではありません。そこは外国とのつながりが一番強い所です。玄関口という言葉がありますが、そこは文化の入口でもあるわけです。そこをうまく使うことです。空港などの場合は長期的に見ないとダメだと思います。例えば、あえて申し上げる必要もないと思いますが、神戸や横浜は、「異国情緒のある街」という呼び方をします。それは何かというと、様々な外国的なものがあるということです。中華街もそうですが、食べ物も、街の人々のファッションセンスもです。やはり神戸の人たちのセンスは、少なくとも私のセンスよりはかなりいいです。それは何故かというと、国際的なものが、江戸末期から、あるいは明治の初め頃から、港を通して入ってきて、それが少しずつ浸透して行って、独特の文化を創り上げたのです。それが良いか悪いかは、人々の判断でしょうが、実際、港はそのような効果を及ぼしてきたわけです。昔は港ですが、今は、やはり国際空港です。それは、飛行機に乗って外国に行く、あるいは外国から人や物を受入れるだけの場所ではなく、近隣の地域に、経済的な影響はもちろんのこと、文化的な影響も及ぼしていきます。広めていきます。その影響は大きいと思います。国際空港の経済効果と、いろんなところで言われていますが、それをうまく使うことです。岸和田市は、恵まれた文化的な遺産、だんじり祭という個性的な資源、それからもっとも現代的な関西国際空港、この3つが備わっている地域です。岸和田市単独で利用することは難しいですが、近隣地域とうまくネットワーク化を図り、地域の活性化に結びつく努力をすればよいと思います。これは地域の固有性、個性の強化を図ることになり

ます。そして地域ブランド、これは古い言い方ですが、それを生み出す核になります。

だんじり祭に関して考えます。だんじり祭は、確かに大きい観光資源で、マスコミにも大きく取り上げられて、非常に有名です。祭りそのものは2日か3日ですが、泉州地域全体では、9月から10月にかけて各地で行われています。だんじり祭は、観光だけではなく、さまざまな経済効果があります。岸和田市でも、「だんじり産業」を市のホームページで紹介しています。大きな産業になるかどうかは、これから次第ですが、だんじり産業を育てて、地域振興のために利用することは、地域振興手段の一つになり得るのではないかと、私は考えています。何らかの形で祭とかかわっている産業が、市のホームページの中だけでも、あれだけの数が紹介されていることを考えると、岸和田市の経済規模からすると、ウエイトとしては、高いと思います。「だんじり産業」という言葉自体は、他の地域では認知されないかもしれませんが、岸和田の人には、よく分かると思います。祭りに関連する産業ということで、岸和田の場合、それはこの地域のブランドや個性化と結びついています。岸和田といえば「だんじり」と、日本中で言われるわけですから、それを「いや、あんなものは。」と言ってしまうのは得策ではないと思います。固有のものを、有名なものをうまく使っていくこと、それは好き嫌いに関わらず大切なことじゃないかなと考えています。これが文化をキーワードとした地域経済活性化の話です。

「ソーシャル・キャピタル」による地域活性化

もう一つの「社会力」の話をしたいと思います。これも地域の活性化と結び付くのですが、経済とも関係が強いです。それと、岸和田には、ある意味ピッタリな話です。

それを説明します。

そこに、「ソーシャル・キャピタル」による地域活性化と書いてあります。ソーシャル・キャピタルは英語で、日本語に直訳すると「社会資本」です。一般的に、社会資本という言葉は、水道や、道路や、電力とかを指すものとして使われています。厳密に言うと、それらは「社会間接資本」と呼ばれます。英語では、「ソーシャル・オーバーヘッド・キャピタル」です。それは経済活動を支援する物的な施設を意味します。ハードな社会資本と書いていますが、それと別のものです。ここでいうソーシャル・キャピタルはソフトな社会的資本で、「社会関係資本」と呼ばれます。何かと言うと、人間関係、グループの間の信頼、規範ネットワークといったものです。もう少し説明させていただきます。ソーシャル・キャピタルはどこで注目されてきたかと言うと、それはアメリカです。アメリカの大都市は、かつては経済的に豊かでした。都市の中心部は最も発展していたエリアですが、1970年代から、または1980年代から、そこは空洞化してきました。人々は郊外に移っていきました。産業も郊外に移っていきました。住みにくいまちになってしまって、都市中心部が空洞化し、衰退してきました。その理由はいろいろあるのですが、注目された一つがこのソーシャル・キャピタルです。何かと言うと、人間関係が非常に希薄になったということです。「砂漠のような東京で」という歌詞がありますが、この問題について、ロバート・パットナムという人が2000年に書いた『孤独なボウリング』という本があります。孤独、一人ぼっちでボウリング。電話帳みたいに分厚い本ですが、アメリカの都市の空洞化を人間関係から分析しています。人間関係が希薄で、衰退しているエリアで、若者が一人でボウリングしている。ボウリング場に行くのだ

けれども、どのレーンにも人はいるのだけれども、みんな一人でボウリングしている。私たちの感覚からすると、ボウリングを一人でするなんて面白くないです。人間関係が希薄になったことを象徴的に表していますが、それがアメリカの都市の衰退を招いた理由の一つだということを書いています。逆に、イタリアの北部のような地方では、昔からの独自の産業が今も残っているエリアがあるわけですね。イタリアのファッション産業、鞆や靴などの皮革産業は世界的な競争力があります。そういう地域をみれば、人間関係は強いです。一人でボウリングをするようなアメリカの地域とは、まったく逆の状態です。

ソーシャル・キャピタルは、どんなものから構成されているのでしょうか。人間関係という言葉を使いましたが、まずネットワークです。人と人との関係、組織と組織の関係です。次に、行動規範。道徳的な規範と考えてもらったらいいのですが、行動規範に対する共通認識があって、それを大切にすることです。それから、社会的規範、コミュニティの共通の価値観です。そして、メンバー間の信頼。それらが重要な構成要素です。今、日本で問題になっている、一昔前であったら考えられないような反社会的行動を平気でしてしまうという問題とも関係してきますね。ネットワーク、行動規範、社会的な規範、構成メンバーの間の信頼。この信頼が最も重要です。ソーシャル・キャピタルの構成要素は、物ではなくて人間関係です。あるいは、組織と組織との関係です。その結び付きの強さが問題です。

ソーシャル・キャピタルに関しては、世界中で研究が行なわれています。例えば、日本の代表的な研究者は稲葉陽二さんです。稲葉さんも『ソーシャル・キャピタル』という本を去年書いています。それをみますと、例えば、企業内の人間関係が強ければ、

言い換えると、組織内にソーシャル・キャピタルが存在し、それが強いほど生産性が向上することが、実証的に分析されています。日産自動車や、三菱自動車、島津製作所を事例として分析していますが、これらの企業は、独特のソーシャル・キャピタルが存在します。それには会社に対する愛情、忠誠心みたいなものも含まれますが、社員同士の結びつきが強く、同じ規模の他の会社に比べたら、一人当たりの生産性が高いと分析されています。企業だけではなく、地域についても、同様の実証的な研究が行なわれています。企業と同じで、地域における人々の信頼、ネットワークが強いほど、言い換えると、ソーシャル・キャピタルが強ければ強いほど、地域の経済的、社会的発展と結び付くことが実証的に分析されています。例えば、愛知県に関する実証研究でいくと、そのソーシャル・キャピタル、これは地域の住民間の一般的な信頼関係のことですが、それが強い地域ほど住民の健康度、精神的な面も含めてですが、それが高いという相関関係が存在します。アメリカの事例では、集団に所属することの効果、それは企業でもいいし、地域コミュニティの集団でもいいのですが、その効果にどんなものがあるかといいますと、まず、コミュニティの結束が強ければ強いほど、金銭、病人の介護、人や物の移動などに対する社会的な支援が容易になることです。それから、健康上の規範が強化されます。また、質の高い医療サービスが確保しやすくなるということが実証的に分析されています。逆に、ソーシャル・キャピタルが希薄で、人々の結びつきが弱い地域では、言い換えると、孤立度が高まると、喫煙、飲酒、過食に陥りやすいという例があります。また、ソーシャル・キャピタルの存在は、体の免疫力を高め、ストレスを緩和させるという研究結果もあります。

つまり、人々の結び付きが非常に大切だということです。ソーシャル・キャピタルの社会への影響については、経済的影響、健康への影響、教育との関係、所得や資産の格差との関係について研究結果が出ているのです。

まず、経済的な影響については、反社会的活動への対応コストが減ります。人々は規範を重んじる行動をしますから、反社会的な人を捕らえたり、更生させたりするコストが減ります。その分を他の経済活動に回すことができるので、投資の増加や生産性の上昇に結び付きます。それから、企業や政府、地域のガバナンスが向上していくという影響もあります。また、摩擦的失業も減ります。健康への影響については、ソーシャル・キャピタルが充実している地域は、死亡率が低く、健康状態も良いことが実証的に証明されています。教育との関係については、ソーシャル・キャピタルの充実している地域は高校退学率が低いです。地域の人たちとの信頼関係が学業成績を上昇させることが証明されています。それから、人間関係が密である地域では、所得分布がより平等で、それによってお互いの信頼感が増し、それが投資を増加させ、経済成長をもたらす効果もあると言われてます。これらのことから、ソーシャル・キャピタルをキーワードにして地域活性化を図ることは、経済にも貢献すると言えます。

次に、ソーシャル・キャピタルをキーワードにした地域活性化はどうすればいいのでしょうか。人間関係が希薄な地域、一人でボウリングする人がたくさんいる地域であれば、まずソーシャル・キャピタルの育成を図るという戦略が必要です。これは人間関係ですから、一から仲良くやりましようとか、信頼関係をもちましようと言っても、すぐにできるようなものではありません。長期的に考える必要があります。

では、岸和田はどうでしょうか。実は、岸和田には既に強固なソーシャル・キャピタルが存在しています。それは祭礼組織です。祭の青年団や、若頭や、年番などの組織です。「祭が好きやから、そういうこと言うんやろ。」と言われるかもしれません。しかし、先ほど名前を挙げました、この研究の第一人者である、日本大学の稲葉陽二さんに、岸和田の祭礼組織の話をする、関心を示されて、「話を聞く限りでは、ソーシャル・キャピタルであることに間違いはない。岸和田祭を一度見たい。」と言われたので、この前の祭に来てもらいました。「僕は祭好きで、ずっと祭に参加しますから、知り合いの方が来られても対応が冷たいですよ。それでも良かったら来て下さい。」と言いました。稲葉先生は、「私は一人でも、徹底的に調べます。」と言われて、9月の祭の2日間、旧市内や春木をいろいろと回って調べられたようです。祭の当日は、結局1度だけ偶然お目にかかりましたが、その後、「どうですか？」と尋ねてみましたら、「見事に機能しているソーシャル・キャピタルです。」という話でした。祭のための組織が、岸和田のいろいろな社会活動の基盤になっていることです。もちろん良い面も悪い面もあるでしょうが、ここまで機能しているソーシャル・キャピタルは、先生が知っている限りでは、日本では他に見当たらないという話しでした。来年もぜひ見たいと言っています。第一人者が言っているのですから間違いのないと思います。僕が言ったら、嘘だと言われるかもしれませんが。岸和田の祭礼組織が、ソーシャル・キャピタルとして機能することを研究している先生が他にもいらっしやいます。例えば芦田徹郎さん。甲南女子大学の先生ですが、芦田先生は社会学者の立場からソーシャル・キャピタルを研究されている方で、岸和田だんじり祭についても分析されています。それが

ら、経済学者でも、先ほどの稲葉先生や、私が日頃お世話になっている山田浩之先生も、岸和田の祭礼組織はソーシャル・キャピタルとして機能していると話しています。ですから、祭礼組織をうまく利用しながら、それを社会力の強化に結び付けます。それが初めに示しましたとおり、地域力の向上に貢献するということを理解して頂けたらと思います。

まとめ

話しのまとめとして、岸和田の地域経済の活性化、あるいは、もう少し広くとらえて、地域力を高める戦略として、2つのキーワード、核があることを申し上げます。

一つは「文化」です。文化に関連する産業を核にした地域活性化を図ることで、そのやり方は、近隣地域とのネットワーク化を図って、歴史的な資源や、だんじり祭や、関西国際空港といった共通資源をうまく利用して活性化を図るということです。もちろん観光も含まれます。地域のブランドを形成して、個性化を図っていくというやり方です。

それからもう一つは、好き嫌いとはもかく、「祭礼組織」という結び付きの強い組織があるわけですから、それをうまく利用しながら、それを地域の活性化に結びつけていくことです。地域経済の活性化とも結び付くという、実証的な研究成果もあるので、それも考えていけば良いのではないのでしょうか。

補論:移動の活性化

次に、補論と書いていますが、移動の問題についてお話しします。地域の活性化を図る場合、人や物をスムーズに移動させることができるかどうかは重要です。スムーズ

な移動の確保は、地域の活性化、特に経済的な活性化に結び付きます。人と物の流れをうまく確保していかなければならないということです。これは、たいへん難しいと思います。なぜかと言うと、それは限られた地域だけで単独でできるものではありません。移動は果てしなく続いていきます。ですから、狭い地域において部分的にも考えなければならぬし、広く全体的にも考えなければなりません。

一つは道路の整備です。どんなレベルの地域でも、道路をうまく整備していくことが重要だと言われます。日本では、自動車を中心とした輸送体系ができ上がっていますから、当然この道路整備は重要です。また、住みやすいまちということから考えるとき、あるいは産業活動、経済活動のしやすいまちであるかどうかを考えるとき、その指標一つは道路です。

もう一つは公共交通のネットワークです。公共交通は、電車やバスなど、みんなで使うものですが、それがどの程度整備されているかです。南海電車とかJR阪和線は都市間鉄道ですから、岸和田市だけの問題ではありません。岸和田市に関係するところでは、例えば、道路との交差状態を改良する、具体的には踏み切りを立体交差にすると道路の渋滞が緩和されるとか、駅を人がスムーズに乗り降りできるように整備するとか、そのような問題になると思います。しかし、それは岸和田市が単独で解決できる問題ではありません。

もう少し考えると、限られたエリアの中で利用が完結するような公共交通ネットワークができるかどうかです。規模の大きいまち、例えば、大阪市とか、京都市のような大都市でしたら、地域内で完結するような公共交通ネットワークをつくることは可能であるかもしれません。例えば、地下鉄はその代表例ですし、新しいタイプの路面

電車、堺にはその計画がありますが、それをつくるとか、バスのネットワークを充実させるとかです。岸和田市では、都市の規模からいうと、地下鉄や新しいライトレール・トランジットは無理と誰もが思うことです。バスのネットワークをどのようにうまく作っていくかを、岸和田市内もバスが走っていますが、そのネットワークで果たして良いのかどうかを考えるのが現実的です。

ここに一つの研究があります。この図は、都市交通手段の適応範囲ということで、都市交通研究会の『これからの都市交通』という本に出ている図を少しアレンジして載せたものです。横軸は移動距離を示します。単位はkmです。縦軸は輸送密度を示します。1日の片道1kmあたり何人を輸送するかを表わします。図の下の方は、その交通手段を使う人の数が少なく、上に行くほど増えていきます。言い換えると、都市の規模が大きくなります。また、図の右の方にいくほど移動距離は長くなります。普通の人とはどんな交通手段を使うかという、1kmぐらいまでの移動距離でしたら、大都市であっても、小さいまちであっても、人は歩きます。特に急がない場合は歩きます。移動距離がもう少し長くなって、2kmぐらいまででしたら、比較的小さなまちでは自転車を使う人が多いです。それよりも大きい規模のまちでしたら、使いやすいバスが存在すれば、バスを使います。それよりも大きい規模のまちになると、モノレールや新しいタイプの路面電車があれば、それを使います。それよりも大きいまちになりますと、大阪や東京ですが、民鉄や地下鉄のような都市高速鉄道を人は使います。移動距離が長くなると、小さなまちの場合は、タクシーや自家用車を使う人が多いです。公共交通がないからです。または、使いにくいからです。赤で囲んでいる部分は公共交通で、

あとはぜんぶ自家用交通です。自分の自転車、自分の車、タクシーも個人的に使いますから、プライベートな交通手段になります。徒歩は、自分の足による移動ですから、公共交通ではありません。

岸和田市は、この図ではどのあたりになるのでしょうか。輸送密度については、岸和田市もいろいろな地域がありますが、図の上の方でないと思います。輸送密度2,000人/km/片道・日から4,000人/km/片道・日のあたりだと思います。また、それから移動距離は海の方から山の方まで移動しても最大10kmぐらいです。現実に、岸和田市内で日常的に移動する距離は、長くても5kmぐらいですね。そうすると、輸送密度と移動距離を組み合わせると、バスのエリアに入ります。

岸和田には巡回バスが走っていますが、いつも空いているなという感じがします。このバスネットワークは、財政的なものとかコストを別にすると、もう少し何とかならないかなと思います。赤字を考えると難しいし、もうからないとは思いますが、福祉的な意味も込めるのなら、バスのネットワークをもう一度考えてみても良いのではと思います。時代が違いますが、私が小さいころは、紀州街道にバスが走っていました。岸和田駅からも、浜校区の疎開道を通って貝塚まで行くバスとか、紀州街道を通って春木から泉大津まで行くバスがありました。今は、走らせても乗る人がいないだろう、もうからないだろうという観点から、そのようなバス路線が廃止されていきます。それは、輸送サービスを提供するバス事業者としては、当然の判断だと思います。しかし、公共交通を必要とする人が多いならば、岸和田市の場合は、小さいバスを使いながら、ネットワークとダイヤをもう少しきめ細かく、うまく構成すれば良いのではと思います。

どんな経験からこれを話しているのかと言いますと、以前、アメリカやヨーロッパ、東南アジアの都市交通を調査する機会がありました。人口でいうと岸和田市ぐらいの都市をいくつか見ました。バスのネットワークをうまく使っています。ヨーロッパの地方都市では、自動車交通はこの辺ほどには発達していません。つまり、自家用車をみんなが乗り回しているわけではないけれども、バスをうまく使っています。それはお年寄りや子どもはもちろん、日本であればいつも自家用車に乗るような年代の人でもそうです。これを考えることが重要だと思います。公共交通によって人のスムーズな移動を確保できたら、それは経済活動とも結び付いて、地域の発展に貢献するのではないかという考えです。この話は、都市計画とも関係があります。むしろそちらとの関係が強いかもしれません。

今日、言いたかったのは、岸和田の経済活性化を考えると、何かの核が必要だということ。その核となるのが、文化と、ソーシャル・キャピタルすなわち祭礼組織です。文化と、ソーシャル・キャピタルすなわち祭礼組織をキーワードにした地域経済活性化を図れば、可能性が広がるのではないのでしょうかというのが、私の提案です。